

希学園 学園長
黒田耕平

未来に つなが 中学受験

～ダイジェスト版～

はじめに

私が中学受験を目指す小学生の子どもたちの指導に携わらせていただいてから、25年がたちました。

私自身も小学生のときに中学受験を経験しました。4年生の頃から小学校の授業が終わるとバスと電車を乗り継いで進学塾に通いました。6年生の頃は、週のうちのほとんどの曜日で塾通いをしていました。もちろん今から考えれば甘い認識ではあったと思いますが、子どもなりにには頑張っていたと思います。しかし、残念ながら第一志望校として憧れであった中学校に合格する夢は叶いませんでした。

結果として、どんな学校なのかほとんど知らない状況の中で受験した中学校にご縁をいただいて、その学校に中高6年間通うことになりました。

このような、いわゆる「成功体験」とはかけ離れた中学受験を経験した私は今、「希学園」という一つの進学塾を代表する立場で仕事をしています。その状況に対して疑問を持たれる

方もおられるかもしれません。

私も、もちろん受験を終えた直後や中学生になった当初は、辛く悲しい思いをしました。ただ、中学受験で第一志望校であった中学校に合格できなかったこと、そしてご縁があった学校に進学して中高6年間で過ごせたことは、自分の人生において大きなプラスであったと今ははっきりと言えます。今の自分があるのは、間違いなくその経験があったからだと思います。

そう思えるのは、両親や親戚の方々、お世話になった塾の先生、小学校の担任の先生など、その当時に私の周りにいてくれた大人が、ひとりっ子でわがままな私に、経験を糧にするこの大切さを教えてくださったからだと思います。だからこそ、私はその先の人生の中で、強さを身につけるための努力をすることができたのではないかと思います。

そんな私だからこそ、小学生の子どもたちに「目標を掲げて、その目標達成のために全力を尽くすこと」の大切さを伝えていきたい、そして中学受験という経験を通じて、将来につながる多くのことを学んでほしいと思っています。そして、自戒の念も込めて言いま

すが、中学受験を目指す子どもたちを支える大人は、その役割の重みを強く心に刻むべきだと思います。

この25年間、本当にたくさんの子どもたちと保護者の方々とともに歩ませていただきました。その中で私が学ばせていただいたことは、何物にも代えがたい貴重な宝物です。共に歩ませていただいたすべての方々に対する感謝の気持ちを込めて、本書を書かせていただきました。

子どもたちにかかわる多くの方々に、少しでも参考になるようなことをお伝えできれば幸いです。

希学園 学園長 黒田 耕平

第1章

中学受験にかくされた本当の意義

「自らの力で乗り越える初めての経験」

- ★1 なぜ勉強しないといけないの？
- 2 小学生にとっての受験勉強の意義
- 3 目標や意義を理解することの大切さ
- 4 自分の弱さに打ち克つ強さ
- 5 苦しいことやしんどいことに価値がある
- 6 「自立」し大人に近づく

1 なぜ勉強しないといけないの？

小学生の子どもをお持ちの保護者の方なら、一度は子どもから「なぜ勉強しなければいけないの？」という質問を受けたことがあるでしょう。皆さんはどのように答えられましたか？　ここでは、私なりの答えを考えてみたいと思います。

小学生になれば、誰もが勉強をしなければなりません。さらに、もし中学受験に臨むのなら、入学試験で合格点を取るために仕方なく勉強しなければならない、と思っている子どもたちが多いかもしれません。

職業によっては、各科目の勉強内容そのものが直接仕事の役に立つということもあります。多くの場合、勉強内容そのものと仕事が直結するわけではなく、極論すれば、算数なら四則計算ができれば日常生活で困ることはほぼありません。複雑な立体図形の問題や水溶液の溶解度の問題などは、専門的な職業に就くことがない限り、まず生かせる機会はないでしょう。子どもたちも大人の態度からうすうすそういった現実を感じているので、「今している勉強なんて、いくら頑張っても将来の役に立たないのに、何でしないといけないの？」と

考えてしまいます。

しかし、私はそうは思いません。中学受験などに向けて勉強することは、子どもたちにとって二つの意義があると思っています。

一つは、「一生懸命やること」の大切さを学ぶ経験ができるということです。大人になってどんな職業についても、「努力」や「責任感」、そして「忍耐力」が必ず求められます。誰しも好きなことや楽しいことなら一生懸命やれるでしょう。しかし、できれば避けたいと思うような苦しいことや厳しい状況でも「一生懸命やること」によって道を切り拓いていかなければなりません。勉強は子どもたちにとってしんどいことが多いですから、それを「一生懸命やること」で、これらの力を身につける効果があるということです。苦しくても「努力」を積み重ね、なんとしてもやり抜くという「責任感」や「忍耐力」を持ち、自分の気持ちをコントロールしながら目標に向かって努力を積み重ねていく経験は、その後の人生において大きな自信と意義につながるはずです。中学受験という機会には、その経験の場の一つになり得ると思います。

そしてもう一つの意義は、「正確にやる」ことの大切さを学ぶ場であるということです。人間ですから、ミスをゼロにすることはできません。それでも、物事を正確にできる力は、何

事においても非常に重要な力です。テストでミスをした場合は点数を失うだけで済みますが、医師などの仕事では一つのミスが命にかかわることも少なくありません。

テストにおいて最も大切なことは「正確に答えを求める」ことです。正確に考えを組み立てて答えを導き出し、質問されていることに対して正しく答えるためには、すべての作業を正確に行う必要があります。勉強も正しい努力を続けなければ身につかないし、問いを正確に把握して、ミスなく正確に作業できなければテストで点数を獲得することはできません。

医師はもちろんのこと、建築士も、スポーツ選手も、物造りに関する仕事も、営業の仕事も、どんな仕事でもお金をいただいている仕事である以上、ミスは大きなマイナスにつながります。より社会的責任が大きな仕事であればあるほどミスは許されないものですから、将来社会で活躍できるような人を目指す上では、子どもの頃から物事を正確にやり遂げる力を身につけることが必要なのですが、なかなか子どもには難しいことです。

正確に作業する力というのは、学力とは少し異なる部分になります。ですから、学力とは別の鍛え方が必要になるわけです。受験勉強においては、ミスが多ければテストの点数は下がります。わかっていてもできない、合わないということでは正解になりません。正確にすることができないと結果につながらないことを突きつけられるのです。

このように考えれば、受験勉強を通じて、将来に役立つ訓練をしているのだという言い方ができるのではないでしょうか。

しかし、このような勉強をする意義や価値を子どもに伝えても、それだけで納得してすぐに行動に移してくれるはずがありません。いろんな機会にその意義を繰り返し伝えていくと同時に、子どもが「一生懸命」「正確に」勉強に取り組めるように保護者の方がどう接するかが大切です。第5章でも詳しく説明しますが、私は、「結果を評価するのではなく、過程を評価する」ことが大切だと思います。例えば、同じ時間内で4問しかできなかったのが5問できるとなったこと、15分で集中力が切れていたのが20分持続できるようになったこと、そのような過程における前進を認めてあげて、大げさなぐらいに評価してあげることが大切だと思います。もちろんテストの点数は高いほうが良いのは当然です。しかし子どもは、頑張ったけれど失敗してしまうことも少なくありません。結果ばかりに目を向けてしまうと、ごまかしてでも結果さえ良ければいい、という曲がった価値観を育ててしまうことにつながりかねません。

一歩一歩子どもたちが前進できているかを見て、その前進に対してプラスの評価をし、も

し後退していればマイナスの評価をする。それを積み重ねていくことでしか、小学生の子どもたちに成長を促す方法はないと思います。

中学受験では、難関中学になるほど、入試問題で要求される学力レベルは高くなります。それは、**単に難しい問題が解ける子どもを入学させたいから**という**ためだけではありません**。そのレベルまで学力を引き上げるには相応の努力を積み重ねることが必要で、そうした努力を積み重ねる力がある子どもかどうかも見極めたいからなのです。

一人前の大人になったときに求められるのは、**努力することが**できる強さと人の気持ち**がわかる優しさ、つまり「人間力」**です。「人間力」を身につけるための訓練になるということが、勉強に取り組む真の目的と言えるかもしれません。

第2章

「人間力」が入試の結果を左右する 塾でこそ担える人間力形成

- 1 本質が求められるようになった中学受験
- 2 あいさつとルール遵守の大切さ
- ★3 仲間との「共走」が成長を支える
- 4 希学園が合宿を実施する理由
- 5 「良い言葉」で心を育てる

3 仲間との「共走」が成長を支える

ここでは「仲間教育」の大切さについてご説明します。

子どもの成長にとって大きな役割を果たすのが「仲間教育」、ピアエデュケーションと呼ばれる子ども同士相互教育です。

子どもは大人よりも生きてきた年数が短いので、経験値が少ないのは当然です。それを大人が教えることで補っていくのが、第一の教育と言えるでしょう。ご家庭では保護者の方が自身の経験から大切だと思うことを伝えるでしょうし、学校や塾では先生が勉強などを教えます。これらは、子どもが成長していく上でとても大切な大人の役目だと言えます。

しかし、大人からの教えは、どうしても自分とは異なるステージからの指導になるので、子どもにとってはどこか縁遠いものと感じることも多いようです。

そこで重要なのが、同じステージや近いステージにいる友達や先輩・後輩の関係の中で受ける刺激です。同じか近い年齢、学年、レベルにいる子ども同士が、相手の子どもを見て感

じることは非常に多く、相手の存在が近いからこそプラスにもマイナスにも影響を受けやすいのです。しかも小学校高学年以降は、子ども同士の影響力はかなり大きいものになります。ですからこそ大人は、**子ども同士の関係がプラスに働くような環境をつくっていく**ことが大切です。

まず、保護者の方が我が子の友達の存在をどう評価しているか。その考え方に子どもは必ず引っ張られます。例えば、小学生の間は「あの子に負けちゃダメよ」なんて言ってしまうと、子どもにとって相手の子はとても邪魔な存在になります。結果、子どもは「親に認めてもらうには、どんな手を使ってもこの子に勝たないといけない」と考えてしまうのです。

本来であれば、それを「克己」の力で乗り越えるべきなのですが、そうではない方向に子どもは考えてしまいがちです。そして同じような境遇、考えになっている子どもたち同士で群れるようになり、群れると負の力は強化されて成長してしまいます。すると、成績の良い子に嫌がらせをしたり、邪魔をしたり、仲間はずれにしたりと、ネガティブな行動を起こすようになります。本人にはそういった考えが強くななくても、仲間の影響でズルズルとマイナスの方向へ引きずられていくこともあります。ですから、保護者の方は我が子さえ良ければ良いという考え方は捨てて、**我が子にとっても周囲の子どもたちにとっても良い環境をつ**

くっていかないと、我が子は成長しない、という考え方を持っていただきたいと思います。

塾という場所は、子ども同士のギスギスした関係が生まれやすい場所だと思われがちです。なぜなら中学受験の結果が大切な中高6年間を左右するという競争原理が働いていますし、塾ではその勝った負けたをモチベーションとして利用して頑張らせるという手法を導入しています。

だからこそ、塾側がどのような考え方で子どもたちを預かって教育するかが重要で、希学園では「競争」ではなく「共走」することの大切さを教えています。

この「共走」という言葉は、本書にお言葉をいただいた、前灘中学校教頭の大森秀治先生から教えていただいた言葉です。最高の共走状況を生み出し、最高の共走仲間を作ってもらうためには、大人が子どもたちの価値観をしっかりと育て、その価値観が実践される環境をつくり出せるようにサポートやバックアップをすることが必要不可欠です。

もちろん塾によっては「他人を蹴落としてでも合格せよ」と指導する塾もあるかもしれませんが。でもそれは人としても企業としても大いに間違っています。さらに言うと、そんな他

人を蹴落とすような子どもでは、大人になってからリーダーとなって人を幸せにできるような人間にはなれません。やはり、受験を勝ち抜くことだけにこだわることは、子どもたちにとって決して良い経験にはならないはずです。たとえ他人を蹴落として生き残ることができても、その子の人生全体で見れば不幸せではないでしょうか。

「仲間」の存在が大きな影響を持つのは間違いありません。ならば、その影響が良い方向に向かうように大人がサポートすることの重要性を、子どもにかかわるすべての大人が認識すべきだと思います。

子ども同士の関係がお互いにとってプラスになるよう、大人は子どもたちに正しい価値観をしつかりと伝えなければなりません。それは実は、勉強方法を教えることよりも大切な要素かもしれません。

「競争」ではなく「共走」できる仲間を持った子どもたちが、学力的にも人間的にも大きく成長できる場をお互いに提供し合えるように、その「共走」を全力でサポートしていくこと、それが、私が非常に大切にすべきだと考えていることです。



仲間との「共走」:「夏期合宿」

第3章

やる気と主体性は環境によって育まれる
ゆるさられる勉強から自ら取り組む勉強へ

- ★1 好きなことで集中力を鍛える
- 2 メディアとのかかわり方
- 3 復習、評価、目標の大切さ
- 4 「男女共学」か「男女別学」か
- 5 教育における不易と流行
- 6 読書が子どもの心を育てる
- 7 「先取り学習」の是非を考える

1 好きなことで集中力を鍛える

効率良く時間を使い、充実した練習をして大きな成果を得るためには、一つひとつの物事に対してどれだけ熱中できるかという「集中力」が必要です。また、集中するのに必要なエネルギーをどう育てるかも非常に大切な要素になります。

そうは言っても「勉強で集中力を育てる」となると、なかなかうまくいきません。たいいていの子どもにとっては、勉強は自らすすんで気が向くものではありませんし、できれば避けたいと思うものですから。

ではどうやって「集中力」を鍛え、育てていくのか。私は「好きなことを好きなだけ好きなようにさせる」ことであれば、それが可能だと思っています。自分が大好きで熱中したい事柄に対して集中する経験を通して、まずは「集中力」そのものを鍛え育てていくのが大事だと考えています。

熱中する対象は、いわゆるテレビゲーム系のもの以外であれば何でも良いです。テレビゲーム系のものがなぜダメなのかは後述するとして、まずはお稽古ごとでもいいし、場合に

よつては趣味や遊びみたいなものでもOK。パズルでもぬり絵でも構いません。大人から見れば無駄だと思うことであっても、まずは熱中して取り組むという経験そのものが集中力の源になるのです。

例えば、パズルのように試行錯誤しながら完成させるものは、できたときの達成感が大きいので、完成した時の達成感を求めて「もう一回やりたい」と思うことができますし、そうできれば大成功です。

一番ダメなのが、「やらされている感」満載で取り組んでしまうこと。これは経験値を増やすという意味ではわずかにプラスですが、「のめりこむ力」というエネルギーを育てることはつながりません。大人にはつまらないことでも、好きで熱中できることを通じて面白さや達成感、エネルギーの生み出し方を子どもなりに学べるという意味では意義があることなのです。親の興味や狙いなんて、ここでは関係ありません。

「中学受験をするなら、お稽古ごとは何年生まで続けさせても大丈夫なのでしょうか」という質問を保護者の方からいただくことがあります。

今の中学受験の現状を鑑みれば、4年生の頭からは週に複数日、複数科目の勉強を塾で学習していく必要があると私は考えています。少なくとも国語・算数・理科の3科目の勉強を塾で学びはじめるべきでしょう。

ただ勉強以外のお稽古ごとくも、4年生や5年生で続けてもらっていても全然構いません。むしろ続けていただくべきだと思います。しかし低学年の頃に比べると、少し減らしてもらう必要があると思います。その必要があるくらい、最近の低学年の子どもはたくさんのお稽古ごとをしています。月曜日はそろばん、火曜日は水泳、水曜日はピアノ……と。それに塾も加わるとなると、遊び時間の確保すらなかなかなりません。週に少なくとも2〜3日を通塾日にあてるとなると、塾以外のお稽古ごとは本人がやりたいこと、保護者がどうしても続けさせたいと思うことだけに絞る必要があると思います。

そして6年生からは、塾以外のお稽古ごとはいったんお休みしていただくことをおすすめしています。本格的に中学受験を目指す子どもたちは、やはり塾に通う日数も増えますし、勉強に必要な時間も増えます。中学受験が終了したあとに、またやりたいことを再開するのが一般的です。

「では3年生までの塾は？」という質問が来そうですね。もちろん希学園でも1年生から学んでいただける環境を用意していますが、私個人の意見としては、お稽古ごとのひとつとして算数1科目だけやってみる、というくらいの感覚で十分なんじゃないかと思っています。国算理社などの全科目で塾に通うのは、小学校低学年にはまだ早い気がします。それよりも「集中力」を養う経験をする機会を優先するべきでしょう。

もちろん受験勉強に本格的に取り組みはじめる時期が遅れると、勉強に費やせる時間が減るのでハンデにはなります。ただ、6年生の夏頃までスポーツなどの勉強以外のことに熱中し続けた子どもが、それに区切りをつけて受験勉強に気持ちに向いた途端に、ものすごい伸びを見せて見事に合格を勝ち取ることもあります。

私を知る限り、6年生の夏休みの途中ぐらいまでスポーツなどにのめり込みつつも、見事合格を勝ち取った例は数多くあります。中学受験をするつもりでも、数を絞ったお稽古ごとであれば6年生の夏まで続けるのは不可能ではなく、子どもが切望するならやらせてあげべきだし、結果として集中力を育てることにつながり、中学受験での成功につながる可能性も十分にあるということです。一様に、やみくもに芽を摘み取ってしまうことが必ずしも正解ではないと思います。

ただ、これは勉強以外のことで鍛えていた集中力を、追い込みの時期に勉強に振りあてる
ことができたから成績が伸びたわけであり、それだけのめり込む経験ができていなければな
りませんし、もちろんスポーツなどを続けている間もコツコツと積み重ねてきた努力がある
からこそ成果に結びつくわけですから、甘く考えてもいけません。

そういう子どもは、勉強も大事だけとお稽古ごとも大事だと考えて続けているのでしょう。
そうした子どもの多くは、努力の大切さなどが人生経験として身につけていますから、やら
され感いっぱいでは仕方なくお稽古ごとに通っている子どもとは圧倒的に違いますし、努力の
積み重ね方を学んでいると思います。もちろんお稽古ごとやスポーツに限りません。カルタ
やパズルなどでも同じです。何でもいいので、**子どもが徹底的に追求できる好きなことがあ
るなら、大切に続けさせてあげるべきでしょう。**

この点に関しては、親と子がしっかりと話し合い、悔いが残らないように決めてください。
そのとき、「勉強優先にすれば悔いが残らない」というわけではない、ということが私からの
アドバイスです。

第4章

思考力の原点は「聴く・話す・読む・書く」
く未来につながる学習の土台を育てるく

- 1 小学生が英語を学ぶことの是非
- 2 言葉の力が考える力になる
- 3 「聴く・話す・読む・書く」には順番がある
- 4 親子の会話が世界で活躍できる力を育てる
- 5 「整理力」を身につけるには
- 6 科目を問わず大切な「イメージ力」
- 7 学力を伸ばすために必要なこと
- 8 算数を学ぶ意義とは
- ★9 子どもの「なぜ？」を大切に

9 子ども「なぜ？」を大切に

私は、「考える力」を育てる上で最初に大切なのは「理由の理解」だと思っています。

例えば、算数の学習である公式を覚えたとしましょう。その公式がそのまま使える形式の問題なら、覚えた公式に数を当てはめるだけで容易に答えを導き出すことができます。しかし、少し問題の問いかけ方が変わったり、設定が変わったりすると対応できなくなってしまう。お子さんの勉強を見られていて、そんな状況に陥ったことはありませんか。これは単に公式を「覚えた」だけで「なぜそのようなようにすれば解けるのか」という理由まで理解していないから応用できなかったのです。「なぜそのようなようにすれば解けるのか」を理解していれば、その公式や考え方を自分の経験として柔軟に使いこなすことができます。これができるのが、いわゆる「応用力」なのだと思います。

こうした「理由の理解」を自主的に深めようとする子どもに育てる第一歩は、日常生活における「なぜ？」を大切にすることです。生きている年数が短い分、子どもには多くの「なぜ？」が生まれます。それは大人の想定や都合など関係なく、常に子どもの中に湧きあがる

ものです。これを大人が潰してしまうことなく、どれだけ丁寧に向き合っていけるかが大切なのです。

子どもの「なぜ？」には、答えることが難しいものや、答えることが面倒に感じるようなものが多数あります。それでも、できる限り向き合って答えていたきたいのです。子どもの「なぜ？」を大切にすることは、子ども自身があらゆることに興味関心を持つとういう意欲につながります。よく「うちの子どもはなかなか初めてのものに興味を持たないんです」という保護者の方がおられます。それはおそらく、子どもは知らないことやわからないことがいっぱいあって、「これは何？」「なぜこうなるの？」とクエスチョンマークがついている状態だったのに、「今は忙しいから」「そんなこと知っても賢くならないわよ」「そんなことよりも勉強しなさい」などと、大人がそのクエスチョンマークを拾うことなく断ち切ってしまうと、興味の芽を摘み取ってきたからではないでしょうか。大人がこのような対応をしてしまうと、興味を持つことの意義や面白さが満たされることはなく、結果的に「なぜ？」を大切にする心が育たないのです。

しかし、子どもは本来は好奇心の塊です。ですから好奇心の塊の状態をいかに持続させるかが、保護者の方の腕の見せどころであり、強く意識すべきところです。新たな発見を目指

し続ける学者や研究者と呼ばれる方々は、皆「なぜ？」と問い続け、大人になっても突き詰め続けています。おそらくそういう方々は子どもの頃から、大人から興味の芽を大切に見守られ、「なぜ？」を大切にしてもらえたからこそ、学者や研究者としての能力や適性が育まれたのでしょう。

例えば、蚊の研究をしている少年の話をご存じでしょうか。蚊に刺されやすい人と刺されにくい人がいると感じたところから、蚊の生態を研究。その飛び抜けた独創性が世界から認められ、コロンビア大学に招かれました。現在は弱冠19歳にして、ノーベル賞受賞者を輩出しているザッカーマン研究所で研究に取り組んでいます。彼は子どもの頃、自宅で「蚊」を飼ったそうです。そういう一見突拍子もない行動も、実は「なぜ？」を満たすための行動であり、それを保護者の方が見守られた結果、19歳にして世界有数の研究者として活躍する今があるのです。

子どもの中にどんな好奇心が芽を出すかは未知数であり、無限の可能性を秘めていると言えます。もちろん命にかかわる行為や誰かを傷つけるような好奇心はブロックするべきですが、そうでなければ、どれだけ広い心で大人が忍耐力を持って受け止められるかが、子どもの未来の可能性を広げることにつながるのだと思います。

大人になればなるほど、「常識」「世間体」という壁ができてしまいがちですが、子どもにはまだそれがありません。子どもの興味関心を大人の尺度で仕分けてしまうことは、子どもの成長意欲や興味・関心を奪ったり削いだりすることにつながりかねないことを、頭の片隅に置いておいていただければと思います。

大人のサポートや見守りを得ながら「なぜ？」を大切にしてきた子どもは、勉強においても多くの「なぜ？」を感じ、その理由を理解した上で経験として積み重ねていきます。その積み重ねこそが「考える脳への成長」を促します。そう考えれば、中学受験は脳が論理的に考えることができる状態へと成長する大切な時期に、多種多様な刺激を通じてその能力を高める貴重な機会だと言えます。中学受験を意義のある経験にするためにも、「覚える」ことが学習だと勘違いしないでください。あくまで「理由の理解」にこだわって「考える学習」に取り組んでほしいです。それが子どもの「生きる力」を鍛えることにもつながっていくと思います。



子どもの「なぜ？」を大切に

第5章

幼少期とは変化させるべき親のかかわり方 ～子どもの考える力を養うために～

- 1 「賢さ」を身につけるには
- 2 知識を生かして知恵を身につける
- 3 子どもを成長に導く助言
- ★4 小学生の子どもに対する親の役割とは
- 5 「追求力」を身につけるには
- 6 学びを深めるには「しつけ」が大切
- 7 自由を与えることで自立を促し、考える力を育む
- 8 大人による正しい評価が成長を促す
- 9 入試シーズンを迎える親の心構え

4 小学生の成長に対する親の役割とは

子どもに対する親の役割は、子どもの成長に応じて変化していきます。ここでは、小学生の子どもに対する親の役割について考えてみたいと思います。

多くの親の手を必要とする小学校入学以前と、子どもが自分の世界を確立していく中学生。その間にある小学生時代はまさに過渡期と言え、幼さが残る子どもに自立を促す期間であり、子どもの成長において非常に重要な期間だと思います。

私は小学生の子どもを持つ親の役割は三つあると思っています。

一つ目は「**価値観を育てる**」ことです。小学生になって、少しずつ自分の力だけでできることが増え、親以外の人々とのかわりも増えていきます。そして、それらの人とかかわっていく中で、善悪の判断基準を確立し、大切なことを見極める力を育てられるかどうかは、子どもの成長を大きく左右します。この時期に「失敗も価値のある経験」ということや「周囲の人々の存在はありがたいもので、大切にしなければならぬ」などという価値観を持たせることができれば、子どもは大きく成長できると思うのです。

二つ目は「価値観を育てる環境を用意する」ことです。本書でお伝えしてきたとおり、子どもは何事も経験を通じて身につけていきます。正しい価値観を育てるには、それにふさわしい場や機会といった「環境」が必要になります。例えば、塾を選ぶ場合、勉強を教えてもらう場というだけなら、極論すればどの塾でもさほど違いはありませんし、合格実績などの「目に見える数字」だけを比較して選ばれるのも一つの方法かもしれませんが、正しい価値観を育てる環境として、ふさわしい場や機会があるかどうかという観点からも塾を見極めていくべきです。もちろん希学園は学力向上に加えて、そうした本質的な価値観や人間力を育てるための環境づくりも大きな目標の一つに掲げています。

そして三つ目は「子どものロールモデルになる」ことです。小学生の子どもにとって、親の存在はとても大きいものです。勉強の大切さや努力の大切さを子どもに学ばせたいなら、まず親自身が学びを楽しみ、子育て以外の部分でも努力を重ねている姿を見せるようにしましょう。例えば、子どもに読書をさせたいと思えば、親が読書を楽しんでいる姿を見せましょう。親が読書しないのに子どもだけが読書に目を向けるわけがありません。

ここで重要なことは、「親は子育てを精いっぱいしていればいいわけではない」ということ

です。もちろん子育ては疎かにするべきことではありませんし、非常に大切なことです。ただ、仕事でも趣味でも何でもいいので、**本当に熱心に打ち込んでいる姿を子どもに見せる機会を作ってほしいのです。**子どもはその姿に憧れを抱くことで、「お父さん、お母さんのようになりたい」と思います。

もちろん受験期に子どもにかかりつきりになるお父さんやお母さんは、子どもに対する大変な愛情を注いでおられることでしょう。しかし子どもにしてみれば、自分ごとなので「面倒」とか「鬱陶しい」という気持ちの方が大きくなりがちです。もちろんありがたいと感じる子どももいるでしょうし、私たちからも親はありがたい存在なのだと話をします。ただ、この考えを小学校6年生の段階で自然と持てる子どもは希有な存在だと思ひましょう。普通は勉強しろとうるさい親の存在は鬱陶しい存在でしかありません。下手をすれば抑圧されていると感じているかもしれない。ですから、たとえ受験生の親であつたとしても、子どもを大切にしながらも、きちんと親それぞれが独自の頑張っている世界を持っていて、そこで頑張る姿を見せ、子どもにも一緒に頑張ろうと言うほうが、子どもにとっては励みになるのではないのでしょうか。「背中で語る」ではありませんが、行動して手本となる姿を見せることも見守ることと同様に大切なことだと思ひます。

「親はつべこべ言うだけで勉強しなくていいから楽でいいな」とか「塾に連れてきて待っているだけだから楽でいいな」と思うのは、まさに子どもの視野です。この視野を広げられるかどうかは、親が普段どういう姿を見せるかにかかっていると云えます。子育てとは別の世界で親が頑張る姿を見せる機会をぜひ意識してみてください。子育てがすべてで、子どもに依存しすぎているような姿を見せると、子どもは必ずそれに甘えてきますし、その姿勢が子どもにとって息苦しい状況を生んでいるかもしれないことを肝に銘じてください。「子どもとともに大人も成長する」ことが、子どもにかかわる大人の最も大切な役割ではないでしょうか。



「子どもとともに大人も成長する」

第6章

子どもの未来につなげる中学受験にするには
「一生懸命の先」を伝えたい

- 1 目標達成のために大切なこと
- 2 「感謝の気持ち」が最後まで諦めない強さになる
- 3 全力を尽くす経験を人生のプラスに
- 4 失敗も必ず成長の糧になる
- 5 AI時代だからこそ「無駄」に価値がある
- ★ 6 「スーパーエリート塾」に込めた想い

6 「スーパーエリート塾」に込めた想い

希学園は、自らを「スーパーエリート塾」と標榜しています。

「スーパーエリート塾ということは、とても優秀な子だけが通える塾なの？」と言われたこともありますし、もしかすると希学園に通う子どもたちは、周囲の子どもたちから「お前スーパーエリートなん？」とか「スーパーエリートがそんなことしてもええんか？」なんて揶揄された経験があるかもしれません。

子どもはある意味、ストレートですし残酷ですからね。そういう意味では若干塾生の子どもたちに申し訳ない気持ちもあります。ただ、この「スーパーエリート」という言葉には、こだわりと想いが込められています。

「エリート」という言葉には、「何かに秀でた優秀な人」というイメージを持つと思います。ただ、その人ひとりが優秀でも、できることは一人分です。しかし、その人が本当に優秀で尊敬される人なら、多くの人の支持や協力を集めることができますようになります。その結果、多くの人を束ねていくことができるようになり、世の中により大きく貢献できるモノやコト

を生み出すことができるようになります。そうした力を備えた人が「スーパーエリート」だと考えています。優秀な人が「エリート」なら、その先の「優秀さと優しさの両方を兼ね備えている人」が「スーパーエリート」なのです。

子どもたちには次のように伝えていきます。

「何か大きな仕事を成し遂げようと思っても、単に優秀なだけでは不十分。君たちが単に優秀な人で終わることなく、さらにその先の『スーパーエリート』になるには、必ず『優しさ』が必要になります。人をいじめたり、自分勝手にわがままだったりする人には、誰もついていけないよね。優しくして良い子だな、と思うからみんなも友達になろうと思うんでしょ。けれど、人に対して優しくなろうと思ったら、自分自身のこととで精一杯な状態では無理だよ。人に優しくできるには『強さ』が必要。だから、人間力を身につけて強く優しい人になろう。

君たちは自分のことが自分の責任でできている？ 苦しいことでも自分の力で乗り越えられる強さを身につけられている？ まずはそういったことができる力を身につけるために、『スーパーエリート』になることを目標にして、自分をもっともつと鍛えていってほしい、

先生はそういう想いを込めて『スーパーエリート塾』という看板を掲げているんだよ」

また、中学受験で子どもたちが目指す難関私立学校の多くでは、校長先生をはじめとした学校を代表される立場の先生方が、学校の教育理念や子どもたちに対する教育方針などについて確固たる信念を持ち、なおかつご自身が体現しておられます。ただ、そうした教育理念や考え方、接し方を学校教育の隅々まで徹底して行き届かせるには、必ず適正な規模があると思っています。

そして、それは塾も同じだと私は考えてます。小学生時代という、子どもたちの未来を決めるような大切な時期にかかわらせていただく上で、人間的成長を大切にする教育理念や考え方を子どもたちに浸透させ、また、その想いを具現化した教育を子どもたち一人ひとりに徹底して実践していくには、必ず「適正な規模」があると思っています。希学園は、むやみに教室展開などの規模の拡大を目指さず、「適正な規模」で、我々にしかできない「こだわり」を追求し続ける塾運営を目指しています。

塾も企業ですから、売上至上主義や塾生数至上主義、合格実績数至上主義など、さまざまな考え方があってもいいと思います。最終的にどの塾にするのかを選ばれるのは保護者の皆

さんと子どもたちです。もちろん希学園も売上は増やしたいし、合格実績も伸ばしたい。しかしそれは、あくまで本質的な希学園の教育理念をぶれさせずに体现し続けていく中で、付随的に生まれてくるべきものだと考えています。

ヨーロッパやアメリカでは、エリートの子と称される人たちが、ボーディングスクールと呼ばれる学校で寮生活を送り、教科指導の枠を越えた全人教育を受けています。これらの学校が、多くの人が入学を希望しているからといって、すべてを受け入れてマンモス校になっていくようなことは絶対にありません、というより、できないのです。営利を目的にしたたぐさんの生徒を際限なく受け入れてしまつては、あらゆる教育の質が下がってしまうからです。

前述のハーバード大学に通い、世界を舞台に活躍している高島君もコラムで詳しく紹介しますが、土台となる部分は小学生時代に培われた部分が大きいと言えます。グローバル時代といわれる今、世界で活躍できるような人材に育っていくために、最もコアな部分が育まれるのは、小学生の時期だと私たちは考えています。つまり、私たち希学園は子どもたちの未来に対して大きな責任を背負っているということです。それを、私も含めた希学園

スタッフ全員の使命として、これからも日々、子どもたちと向き合い続けていきたいと思
います。



世界を舞台に活躍している高島君と

高島峻輔さんインタビュー

本編で登場した、小6塾生からの質問に「入試で力を出し切るためには、感謝の気持ちが必要」と答えてくれた希学園の卒塾生。彼は高島峻輔さんといい、灘中・灘高を卒業後、東京大学とハーバード大学にダブル合格し、現在はハーバード大学に通われています。本書発刊にあたり、改めて当時の気持ちと、希学園での中学受験時代の思い出を本書の筆者、黒田との対談の中で語っていただきました。

感謝の気持ち

黒田..本日はよろしくお願いします。早速ですが、「入試で力を出し切るためには、感謝の気持ちが必要」と答えてくれたときの経緯を聞かせてもらえますか。

高島さん（以下敬称略）..感謝の気持ちを持つということは、僕にとっては非常に自然なこと。自分のさまざまな経験が影響していると思うのですが、一つ挙げるとすると、やはり東日本大震災の影響は大きいと思います。震災が起こったのが中3になる直前だったのですが、その後何度か灘校生徒会の仲間と東北を訪れました。その際に現地の高校生と交流する機会をいただいたのですが、初めて自分が今いる環境を客観視できたんですね。自分がいかに恵まれた環境にいるのか。好きなことを好きなように学べていることに対するありがたみを実感しました。そう考えると、そもそも入試

で力を出し切れるかどうか以前に、受験できることがありがたいなと。受験に挑戦できる人は多くないし、受験したくてもできない人たちもいる中で、まず受験できる環境にいることに対する感謝の気持ちが大事だと感じたんです。

黒田..後輩からポンと出てきた質問に対して、とっさに出てきた言葉だから、高島くんの中でかなり浸透している想いなんだと感じました。

しかし、高校生の時点でなかなかそういう考え方を持てる人って少ない気はするよね。そういう意味では、震災のときにいろんな人たちと触れ合って、実際に現地に行って、いろんなものを見たという経験値が、やっぱりすごく大きな刺激になったんでしょね。

高島..中高時代に学校の外に出て、多くの人と出会ったことは大きな財産です。あとはスポーツ選手もよく感謝の気持ちを言葉にしますよね。僕はスポーツ選手ではないので比べるのも変ですが、周りに支えてもらっている、というのは彼らの感覚に近いかもしれません。小学生の頃にスポーツ選手の伝記を読むのが好きだったので、その影響もあると思います。

黒田..そういう意味では、小さい頃から良い本とか、良い人などに、きちんと触れられていたんだろうね。まさにこの本で私が伝えたいメッセージの一面にそういうものがあるんですよ。どこまで多くの経験を小学生にさせられるかという大人としての使命がある中で、限界があるからと諦めるのではなくて、さまざまなことにチャレンジさせて、さまざまな人と話をさせる、さまざまな書物に触れさせる、といった体験を通じて、人として大切にしなければならぬ考え方を子どもたちが学べる機会をたくさん設けていくというのは、非常に大切なことだと思うよね。

高島.. もちろん、両親の影響も大きいと思います。勉強しなさいと言われた記憶は殆どありませんが、「ありがとう」と「ごめんなさい」はきちんと言えるようになりなさいと言われていました。こう考えるとやはり少しずつの積み重ねがあつて、「感謝の気持ちが必要」という言葉になって表れたんでしょうね。

黒田.. そうだろうね。でも、そういう考え方つてやっぱり大事だよな。ひとりでできることは限られていて、周りの人の支えがあつてこそ自分があるという考え方は、どの年代にも、それこそ社会人にとっても大切に、根底にそういう考え方があるかどうかは大きいと思います。

「感謝の気持ち」から生まれるもの

高島.. 今アメリカの大学で学ぶ中でも、周りから多くのものをいただいていたことへの感謝を日々感じています。奨学金を大学からいただいていることも、大学受験時に先輩にサポートしてもらったことも、それこそ小中高の学校生活も含めて、さまざまな場所でさまざまな人に支えられていると。それに対して、恩を返すことは難しいかもしれないけれど、下の世代にその恩を送ることはできるんじゃないかと思うんです。この「恩送り」は自分の力やモチベーションになっていきますね。理事長を務めているNPO法人留学フェローシップの活動もその一環で、文部科学省や各地の教育委員会などと協働し、海外大学を目指す日本の高校生を支援しています。

黒田.. なるほど。幼い頃はしてもらって当たり前で、自分では何もできない。でも、まずは自分のことは少しずつ自分でできるようになるステージが来て、次に人のために何ができるかと考えるようにな

り、人を喜ばせるために、というステージに立つべき。そういう意味では中学受験というのは、他人の支えが必要な受験ではあるんだけど、最後の最後は子ども自身の力でしか乗り越えられないよね。ということは、そこで頑張つて出した結果は、もちろん自分自身にとって嬉しい結果でもある一方で、その結果によって周りを喜ばせたり、幸せな気持ちにさせたりできるという、支えてくれた人たちに対する恩返しができるから、実はすごく貴重な機会という側面はあるんだよね。

高島.. 子どもにとって他人の期待を背負う最初の大きな機会ですよ。そういう意味では、僕の中にも中学受験は貴重な成功体験として無意識のうちに残っているかもしれない。

黒田.. 中学受験は中学校に進学するための受験だけど、それだけが目的ではなく、隠された本当の意義があつて、子どもの成長にとってすごく大きな意味を持たせることができるものだと思います。もちろん、中学受験だけがその機会ではなくて、スポーツでも芸術でもいいのだけれど、目標を掲げてその目標達成のために多くの人の力を借りながら、自分自身をより高めていくための努力をする、そういう過程を小学生に経験させることは、その先、中学受験を突破するためだけでなく、中学生、高校生、大学生、社会人へと成長していく過程の中で意味のある、重みのあることだと思うんだよね。

経緯と縁

私は昨年三月末で、教頭としての八年間を含め、生徒としての六年間を併せると四十五年間に亘った灘校生活にピリオドを打った。

私と黒田さんとの御縁は、私が渉外を主に担当する教頭になってすぐに御あいさつを戴いた時に始まる。

それから一年経つか経たない頃に、塾業界に流れた噂話があった。それは、希学園の先行きを懸念する類のものであり、希学園が、ある教室を閉めたことに端を発していた。その噂を信じたわけでもあるまいが、希学園の講師陣が大挙して他塾に移籍するという騒動も起きた。噂が噂でなくなりそうな雲行きであった。

その時点での私のスタンスは、噂の真偽はともかく、希学園がそのような渦中にあること自体に、一種のもどかしさを覚えていた。

というのは、希学園が浜学園から袂を分かった当時の学園長の御子息が灘の卒業生であったこともあり、管理職に就く前から、そもそもその動向を良くも悪くも注視していたことに起因する。私が学年担任をした五十五回生などは、塾別合格者数で学年最大勢力を誇り、文字どおり飛ぶ鳥を落とす勢いがあつたのだ。その前学園長が東京に拠点を移し、浜学園の巻き返しもあつて、私が教頭になつた頃は、一時の勢いは失せてはいたものの、私としては噂が現実になるのは忍びない思いがあつた。

それは、私が希学園を覇風にしていたということではない。元来、私は性格的に、独占や寡占を好まない。特に教育の世界では多様なやり方やよきライバルに恵まれることで、互いをより伸ばすことができると考えている。さらに資本力にものを言わすのではなく、教育方法を含め、各々の創意工夫によってより多様な教育環境を育むのが本筋だとの思いも強かつた。

私が当時、希学園の噂話に多少いらだつたのは、資本力にものを言わせて教室数を増やし、合格者の数がすべてだと言わんばかりの風潮が一層強まりそうだったからである。そういう意味では、さしたる資本力を持たないと思われた希学園に、多少の判官びいき的心境があつたかもしれない。

更に、私が担任した五十五回生や六十二回生の希学園の出身者には個性的な生徒が多い割には、人間関係にいざこざが少なく、保護者からの評判も悪くなかったことが、塾風への関心をもたらしっていたかもしれない。

そのような状況下、私は黒田さんに次のような話をした。「灘校は世間的には日本で一番評価の高い学校で、入学希望者も数多い。だからと言って、これ以上規模を大きくすることは絶対にない。規模を大きくすれば、灘校を灘校たらしめている学年団システムが維持できなくなり、灘校が灘校でなくなるからだ。灘校が灘校であるためには、今の規模が必須だ。灘校は日本で一番有名な中小企業だし、それでよいと思っている。希学園は、拡大路線を取る他塾と一線を画し、日本で一番有名な中小塾を目指したかどうか？」と。

黒田さんは、この話に共感してくれたようで、その後の塾の運営に生かして下さったように私は思っている。希学園は、その後悪い噂を一掃したばかりか、中学受験の名門としての地歩を着実に固めている。

最後に、もう一度言う。私は希学園に肩入れしているわけではない。どの塾にも、尽きな

い拡大路線や過剰な競争主義を戒めてきたつもりである。ただ、なかなか耳を傾けては貰えなかった。希学園の在り方が塾業界の常識に一石を投じたとすれば、それは、偏に黒田学園長の英断によるものである。

二〇二〇年初春

前灘中学校教頭 大森秀治

